

和音に対する顕在的・潜在的態度の研究

阪本 美月

音楽は、音の高さ、テンポ、メロディなどさまざまな要素が組み合わさっている。そのため、音楽がもたらす感情を研究するときは、特定の要素を取り出し、その他の要素を統制するのが望ましい。本研究では「調性」に着目し、和音に対する態度を測定することとした。調性については、一般に「長調—嬉しい・快」「短調—悲しい・不快」という印象をもつと言われているが、一方で短調の音楽がポジティブな効果をもつと報告している先行研究もある。たとえば、Kawakami et al. (2013)は、短調の音楽を聴いた際、「悲しい」という音楽の感情的性格とは別に、「ロマンティックな」「浮きだつような」などのポジティブな感情が生じることを報告している。

本研究では、和音に対する態度を顕在的・潜在的に測定し、短和音の持つ「快」の側面を明らかにすることを目指した。顕在的態度は質問紙を用いて測定した。潜在的態度を測定するために、潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT)を使用した。これは画面に提示される単語刺激やヘッドホンから聞こえる音刺激が、画面の左右に提示されている2種類の対となる概念(快—不快、長調—短調など)のどちらに当てはまるかを、キー押しで反応させる課題である。IATでは、反応時間が短いほど、概念間の潜在的連合が強いと考える。

実験1では、2種類のIATを行った。「長和音—快 vs. 短和音—不快」と「長和音—快 vs. 増三和音—不快」である。実験の結果、どちらのIATでも有意な連合が認められた。質問紙の結果から、長和音は快、増三和音は不快と評価されたが、短和音に関しては、快とも不快ともいえないことがわかった。また、「長和音が快で、増三和音が不快」という潜在的連合は、音楽能力が高い人ほど強かったのに対し、「長和音が快で、短和音が不快」という潜在的連合は音楽能力によって変わらなかった。この結果をふまえて、短和音が「不快」だけではなく、何らかの「快」の要素を持っている可能性について実験2で検討することにした。

実験2では、3種類のIATを行った。「短和音—快 vs. 増三和音—不快」「長和音—活動的 vs. 短和音—非活動的」「増三和音—活動的 vs. 短和音—非活動的」の3つである。IATの結果、短和音は増三和音に比べて相対的に快であり、長和音に比べて相対的に非活動的であるという潜在的連合が見られた。質問紙の結果から、長和音は快、増三和音は不快、短和音は非活動的と評価されることがわかった。また、音楽能力が高い人ほど、「長和音が快」「増三和音が不快」と評価したが、それ以外の顕在的・潜在的指標には音楽能力による差は認められなかった。

実験1, 2の結果から、顕在的にも潜在的にも「長和音 > 短和音 > 増三和音」の順に快と評価していることがわかる。また、短和音は、顕在的にも潜在的にも「非活動的」と評価された。つまり、短和音は、長和音に比べると非活動的であるために快の程度が低いように感じられるが、増三和音(不協和音)に比べれば不快ではないといえる。これは、悲しい音楽を聴く際、ネガティブな感情だけでなくポジティブな感情も生まれるという「音楽における混合感情」の理論とも一致している。今後の研究では、短和音はなぜ快と不快の両方の要素をもっているのか、短和音に対する顕在的・潜在的態度の個人差はどんな要因によって決まるのかについて検討する余地がある。(基礎心理学)